

# 山形大学附属博物館報 30

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

2004. 3

## 目 次

一年の旅、旅の一年……………	元 木 幸 一 (1)
英国の大学博物館—オックスフォードとバーミンガム—……………	阿 部 成 樹 (2)
資料紹介 橋本(五雲亭)貞秀《陸奥出羽名所之図》……………	(4)
「博物館に通う」ということ Information Desk……………	(5)
平成15年度事業報告……………	(6)

## 一年の旅、旅の一年

館長 元 木 幸 一

これを書いているのは、平成15年12月26日です。年末も押し迫った頃なので、発行される4月のことなど思いもよりません。年末気分、一年を振り返ることにします。そこで「一年の旅」と名づけました。

4月に附属博物館長に就任してから、博物館長職をずいぶん楽しませてもらいました。ご存じないかたが多いでしょうからお断り申しますが、本職は無給です。まあ言ってみればボランティアのようなポジションなのです。カミさんからはさんざん揶揄されました。でも私の気持ちとしては、無給でよかったという気持ちが約半分です(半分です)。というのは、おかげで気楽にできるし、「いつでも辞めたるぜ」という気分ですので好き勝手言えますし、どうせやるなら楽しまなくちゃ損という感じでいられます・・・お手伝いのTさん、Sさんご免なさい。

そんな気分で進めた附属博物館の今年の統一テーマは「旅」でした。まず、公開講座で、「旅の博物学—観光、巡礼、渡り鳥—」を10月に催しました。旅を日本文学、西洋美術、映画に追い、わが国にいかにか旅の文学が多いか、また映画で旅がいかにか主要なテーマになっているか—いや旅こそが映画の主題だといっても良いほど—、そして画家の旅がいかにか新しい画像を生み出してきたかを、手練れの語り手(不肖私以外)によって分かりやすく、面白くお話しいただきました。そして、

山形からのお伊勢参りなどの歴史的、民俗学的なお話は本当に為になったし、回遊魚の話は生き物の不思議さをまたまた私たちに突きつけてきたのでした。最上川に生まれた鮭を生後一週間で北上川に移し替えると、海からどちらの川に戻ってくるか・・・?など(答えは、一番下の行をご覧ください)。

11月には特別展「江戸時代の旅いろいろ」を開催しました。学芸研究員の発案で、旅姿仮装にて客引きをすべしということになったのですが、結局は、股旅姿と、黄門様姿のコスプレ大会になりました。ポラロイド写真での撮影も好評で、大勢の方の鬘姿が記録として残ることになりました。参加していただいた学生諸君、学外の方々(～さんのお母さんも)、そして仙道学長、ありがとうございました。このコスプレ大会のお陰で、ノリ易い人と、ガードが堅い人の区別がはっきりしました。ノリやすい方々(「踊る阿呆」でしょうか。ちなみに、かく言う私は阿呆一番乗りでした。娘には「お父さんとは一緒に歩かない」と言われました。まあ当然でしょうね)のお陰で大好評のうち特別展を閉じることが出来ました。とはいえ、肝心の展覧会も、とても面白かったのではないのでしょうか。十日町周辺の絵図(そこに出てくるくさとうや)は、いまの佐藤屋でしょうか)とか、巡礼日記とか、興味津々だったですよ。

というわけで、平成15年度は「旅の一年」だったのです。さて、平成16年度は、「商いの一年」となる予定です。独立行政法人化した山形大学ですが、本当の意味での「商い」とは何かを、経済

的側面だけではなく、文化的側面からも考えてみたいと思っています。今年も附属博物館の行事にすすんで参加して下さることを期待しております。博物館、要注目！ですよ。（答え：北上川）

## 英国の大学博物館 —オックスフォードとバーミンガム

学芸研究員 阿部成樹

近年、大学附属の博物館／美術館の重要性が日本でも認知されるようになり、旧帝大7校がほぼ足並みを揃えて博物館施設の整備に乗り出したことは、周知の通りである。考えてみれば、多くの学問は未知のモノとの出会いから始まるのだから、博物館とは学芸の原点を想起する場所と断言していいし、そうしたものとして今後発展していくことを望みたい。

さて、その大学博物館整備の中で範とされているのは、他の多くの教育政策がそうであるように、アメリカの制度であるようだ。たしかにコロンビアやエールといった有力校は、それぞれ複数の専門化された博物館を擁しており、収集の質も高い。例えばシカゴ大学は、ホームページによれば十指に余る博物館を備えているようだし、ハーバード大学附属のフォッグ美術館は、初期ルネサンス美術や近代フランス絵画のコレクションで名高い。その一端は、上野の国立西洋美術館が特別展を開いて紹介するほどだ。これらアメリカの諸大学附属博物館の充実ぶりは、たしかに他国に類を見ないだろう。

だが、こうした重厚長大な充実ぶりを、われわれがそのまま模範としにくいことも事実である。樹木を移植するには、土壌が必要だ。大学の規模や役割、その背後にある社会的なスケールの違いを考えずに外形だけを取り入れようにも、そのお手本には着地点が見つからないだろう。また一般に、目指すべき選択肢は多い方がよいとも言える。そこで、いささか旧聞に属する訪問記になるが、10年ほど以前に訪れた英国の2大学の美術館について紹介してみたい。管見に過ぎないが、ヨーロッパ諸国で大学博物館がもっとも重視されているのは、英国であるように思われるからである。

ロンドンを列車で出発し、コンスタブルの画に

描かれているような田園風景を見ながら1時間ばかり走ったところに、大学都市オックスフォードはある。町のいたるところに大学の学寮や礼拝堂の古い建物が散在しているので、都市そのものが博物館ともいえる。大学附属のアシュモリアン博物館は、この町のポーモント街に面している（写真1）。

設立のそもそもの発端は、1602年にトーマス・



写真1 アシュモリアン博物館入口

ボドレーが開いた古代コレクションのギャラリーだというから、前史を含めればすでに400年の歴史を持つことになる。その後徐々にコレクションは成長し、1675年にエリアス・アシュモール——彼はオックスフォードの卒業生だった——の手から大学に寄贈された。その際の条件に基づいて大学は専用の建物を新築し、1683年に開館することになる。注目したいのは、その際すでに博物館は一般に公開されており、こうして同館は英国で最初の公共博物館になったということだ。その後1845年に、C. R. コケレル設計の現在の建物が開館している。

新古典主義様式の堂々とした外観を持つ建物の内部は、比較的小さな展示室に分かれていて、ウッチェロの《狩り》といったルネサンス期の重要な絵画と素描で知られる美術作品のほか、特に近代に入って数を増した東洋の美術・考古資料を展示している。観客は、部屋から部屋へと巡るうち、世界のさまざまな場所、さまざまな時代の遺物が一堂に会している不思議さに目を見張り、博物館体験の醍醐味を感じるだろう。このような収集は、近年よく言われるように、確かに植民地主義の産物かもしれない。だが、ロラン・バルトにならってこう言っておこう。植民地主義の産物かもしれ

ないが、にもかかわらず、この博物館は面白く有益だ、と（『テキストの快樂』60頁参照）。

同じ路線を走る列車にさらに1時間ほど乗ると、バーミンガムに到着する。工業都市として有名だが（ワットが蒸気機関を製作した町である）、駅から大聖堂までの中心街は、やや狭い街路に人があふれ、活気にあふれていた。日本人の姿は見かけない…とっていると、デパート1階に日本の化粧品メーカーのコーナーがあり、日本人の女性店員がいて、なんと振り袖を着ていたのに驚いた覚えがある。

市郊外にあるバーミンガム大学のキャンパスは、中心部のロマネスク風の塔を持つ建物（写真2）と、ガラス張りの現代建築が巧みに配置されていて、歩いていて飽きない。ここもまた、オックスフォードと趣は違うが、キャンパス自体が一種の博物館となっている。そして同大附属のバーバー研究所美術館も、アシュモリアンとは違った意味で、このキャンパスにマッチしている。



写真2 バーミンガム大学キャンパス

この館は、ヘンリー・バーバーが遺した収集と財産をもとに、未亡人マーサの意志によって大学附属博物館として開設された（1939年）。写真3に見る通り、ロバート・アトキンソン設計の建物は典型的なアール・デコ様式である。コレクションはほぼ西洋美術に限られていて、中世末のシモーネ・マルティニから19世紀のゴッホまで、貴重で愛すべき絵画を静かな環境でゆっくり見ることが出来る。アシュモリアンと同じようにレクチュア・ホールを備えている他、この館の特徴として、美術と音楽の専門書を備えた図書館とコンサートルームが併設されている。このふたつの領域の教育と研究に役立てることが、マーサが示し



写真3 バーバー研究所美術館（同館HPより）

た寄贈の条件だったのである。

こうして見ると、ふたつの大学博物館は、それぞれ異なる魅力を持っていることが分かる。アシュモリアンは、広く知の領域を百科事典のように立体的に展示して圧巻であり、いかにもこの大学にふさわしい。同じくこの大学に付属する自然史博物館とあわせて訪ねれば、学術の世界の縮図として完全であろう。

これに比較するとバーバーは規模が小さいのだが、ライブラリやコンサートルームを備えることによって、文化施設としての個性を明確にしている。

その他、ホームページから知られるように、両館とも多様な活動を日常的に展開していること、そしていずれも自らの特質に適した優れたデザインの建物を持つことにも注目しておこう。

大学博物館といった場合、ややもするとアシュモリアン的なあり方が思い浮かぶかもしれない。たしかに、歴史ある大規模な大学の博物館が手本とするにふさわしい館であろう。だが、バーバーのようなあり方もまた、大学附属の文化施設として有意義なのではないだろうか。大切なのは、猫も杓子も同じ理想を目指すことではなく、大学が拠って立つ土壤に自然に根付く施設を思い浮かべることはないかと考える。

\*両館のホームページ：  
アシュモリアン博物館  
<http://www.ashmol.ox.ac.uk/>  
バーバー美術研究所  
<http://www.barber.org.ac.uk/>



## 資料紹介

### 橋本（五雲亭）貞秀 《陸奥出羽名所之図》



幕末～明治期 木版彩色 36.5 × 71cm

今回取り上げる資料は、幕末から明治初期にかけて活躍した浮世絵師、橋本貞秀（さだひで）の作品である。平成15年度に開催した特別展「江戸時代の旅いろいろ」で展示した資料なので、実物をご覧になった方も多いのではないだろうか。

まずは作品を眺めてみよう。最初に目をひくのは、まっすぐに引かれた水平線、そしてゴツゴツと隆起した山並みであろう。山の間には川や街道、町がひろがり、画面に散らばる短冊には地名が書き込まれている。一般的に、地表面を上空から斜めに見下ろした図を「鳥瞰図」と呼ぶが、この絵を見ていると、まさしく鳥の背中に乗って遠くを見渡したかのような気分になる。それは我々がモノを見るのと同じ3次元の世界を、画面上に作り出しているからであろう。このように鳥瞰図は立体感や遠近感が直感的に把握できるという利点がある。だがその一方で、地図のように距離や面積を正しく読みとることは難しい。また、山や丘の向こう側が表現されないという欠点がある。

ここに描かれているのは、米沢城を中心として南は猪苗代湖、北は山形県上市市までの風景を、おそらく福島市あたりから眺めた風景だが、この景色を一枚の絵図におさめるために、貞秀は実際の距離や面積を縮めたり省略したりしている。湖や町の広さは実際とはだいぶ違い、町並みも簡略

化されている。中央の米沢城などは、あるはずのない天守閣がでかでかと描かれている。だが方角はだいたい合っているし、どこにどんな名所があって、街道はどこへ通じていて、全体の地形がどうなっているのかは、ひと目で把握することができる。

このような、鑑賞にも堪え地理的説明も可能な鳥瞰図は、江戸時代後期に数多く描かれるようになった。今でいう旅行ガイドブックのような名所記や道中記、名所図会などが出版されるようになると、正確さ、わかりやすさが求められるため、鳥瞰図がとても重宝された。やがて鋳形蕙斎（くわがたけいさい）や葛飾北斎、そして貞秀らによって浮世絵の一ジャンルである「一覧図」として確立されていく。

その「一覧図」の第一人者と言われた貞秀は、その細密な、精緻を極めた描写で評判が高かった。一般的に教養水準の低い浮世絵師のなかでも、貞秀は抜群の教養と見識を持っていたと言われているが、それは貞秀の制作態度にもうかがえる。彼は実地調査に基づいて絵を描いたと言われており、《海陸道中画譜》（1864年）の序文には、はっきりと貞秀自身の言葉が記されている。

「大約名所を描んにも親しく実地を踏で見ざれば其真景ハ写しがたかり」

貞秀は、南は長崎、北は松前まで日本各地を旅して歩き、行く先々で多くの真景図を描いている。また、風景を写生する他に、地誌や古絵図をひもといたり、人々の話を聞いたりすることで作品を完成させた。この作品もおそらく、そのようにして描かれたものであろう。

「一覧図」などの風景作品の他に横浜の新風俗を扱った「横浜絵」の第一人者として活躍した貞秀だったが、没年もはっきり伝えられていないほど、その晩年はさびしいものだったようだ。ほとんどの浮世絵師たちの例に漏れず、画風は時流から外れ、世間から忘れられていった。幕末から明治初期にかけての洋画の芽生えや写真の流入などに押され、明治5年頃には横浜絵も終焉を迎えている。

しかしながら、貞秀が特筆すべき作品を残すことができたのも、この時代の画家の共通体験として、西洋画との出会いが大きかったのではないだ

ろうか。遠近法による空間の表現方法だけでなく、貞秀独特の実証主義的精神をも育まれたに違いない。

当館にはこの作品の他にもう一点、貞秀の作品が所蔵されている。ご興味のある方は附属博物館に観に来ていただきたい。

主な参考文献

- ・匠秀夫「横浜錦絵と五雲亭貞秀」『神奈川県美術風土記 幕末・明治篇』、神奈川県立美術館、1970
- ・矢守一彦「古地図への旅」、朝日新聞社、1992
- ・三好唯義「貞秀＝玉蘭齋ノートー地図および地図的作品への手がかりとして」『神戸市立博物館研究紀要 第15号』、神戸市立博物館、1999

(附属博物館 庄司 高子)

## 「博物館に通う」ということ Information Desk

各県がそれぞれ競い合うようにして、県立の博物館・美術館を建設するという時期がひと区切りつき、早い時期に建てられた館の老朽化が問題になってきた頃、俗に〇〇科学館、〇〇自然館という施設が次々と建設されるようになった。

「仕事上の興味」と「野次馬根性」から、私も旅先・訪問先ではこのような自然系の施設も訪れるようにしているが、回を重ねるうち、それらの施設には共通点があることに気づかされた。まず、当然ながら体験・実験コーナーが多いこと、次に来館者にはリピーターが多いことだ。

日本海側の某都市にある自然科学館を例にして、話を進めてみたい。

その館は、他の公共施設も隣接した文化・スポーツの一大ゾーンとなっている。きれいに整備された環境・明るく開放的な館内に、おのずと誰を対象に、何を目的に造られたかがうかがい知れるような気がした。

訪ねた日は、休日だったこともあり館内は多くの見学者で賑わい、その大部分は小学生と家族連れだった（なかには、科学好きの彼から無理矢理付き合わされたとおぼしき若い女性の姿も）。

「この前来たとき」だの「このあいだは・・・」

などという会話から、来館者にはリピーターが多いことにまず驚き、そして来館者の年齢層の広いことにも驚く。以前、この手の施設を訪れた知人が「迷子が多い」と形容していたことを思い出した。子供は自分の興味のある分野のブースに走り、大人はついつい子供の監督を忘れ、シミュレーションコーナーで立ち止まる。おまけに館内は広いときたら、「迷子」とまではいかなくても、「どこに行った!？」が多くなるのも頷ける。

「見て、触れて、楽しむ」をキャッチフレーズとしているようだが、「ハイテク」「ハイビジョン」「バーチャル・リアリティー」「3Dシアター」などという案内板を見ているだけで、ここが「科学館」であることを忘れ、「テーマパーク」にいるような錯覚さえおぼえてくる。「科学」とひとくちでいってはいるが、科学から物理、地球環境問題、機械工学に近いところまで守備範囲が広い。「風の力」の体験コーナーで「マトリックス」気分を味わい、「フライトシミュレーション」の搭乗券を握りしめて順番を待つ。いつの間にか私も「迷子予備軍」となっていた。

公開の実演・実験コーナーも充実していて、館内をくまなく巡れば、大人でさえも「科学の子」になったような気分になるのだから、子供達はなおさらであろう。子供の入場料は300円弱、何とか、負担を感じずに出せる金額である。自発的に、また、親にせがんでのリピーターが多いゆえんであるだろうか。

また、サイエンスラボラトリーといわれる工作・実験・観察コーナーにはそれぞれ係員が配置されている。あるコーナーには、デパートの受付嬢と見紛うような制服を着た女性が、また、違うコーナーには、様々な年齢の男性が。職員の潤沢な配置に、驚きと羨望から、たまたま「皆さん職員の方なのですか」と質問してみると、男性のほとんどがサイエンスボランティア、メンテナンスサイエンスボランティアといわれる方々なのだという。交通費・食事代程度の実費で科学知識普及のためにお手伝いしているとのこと。皆さん実に楽しそうに仕事をこなしておられた。

さて、そろそろ本題に戻らなくてはならない。山形大学附属博物館が将来目指しているもののいくつか、形となってその自然科学館にあった。

面積をたっぷり取った建物は勿論のこと、ボランティア制度の導入もしかりである。「楽しい博物館」「また来たくなる博物館」、それにつながるヒントを数多く見つけることができた気がする。

「図書館に通う」とはよく聞く言葉だが、「博物館に通う」は滅多に聞かれない言葉である。法人化を目前にした大学附属博物館において、「学内外の方々から、通ってもらえる博物館」を考えていくことは大切なことと思える。

一次資料を収集・展示し、貴重な資料や学術資料には事欠かない本館ではあるが、果たして「もう一度」と言っていただけなのであろうか。「楽しかった」と思っていただけなのであろうか。

現在、博物館・資料館の娯楽施設化が議論され、それぞれの立場で批判・擁護が飛び交っているが、どのような方針や性格の館であれ、「また、来てみよう」「楽しめる」は不可欠なのではないのだろうか。なにも館員がミニスカートの制服で解説をしようというのではない。「なるほど」「そうだったのか」等、すべての発見が「楽しみ」につながるのではないだろうか。

ケースの中で大切に公開し、後世まで伝えていかねばならない資料もあれば、見るだけでなく、触って感じてこそその体験もある。そんな意味で自然科学館の在り方は、本館にとっての良き指針となってくれるだろう。

(附属博物館 高橋加津美)

## 平成15年度事業報告

平成15年度に本館で実施した博物館実習の単位修得者数は下記のとおりです。

(単位：人)

区分	1回目 8.5～8.8	2回目 9.9～9.12	合計
人文学部	19	12	31
教育学部	6	21	27
理学部	16	9	25
学外者	1	0	1
合計	42	42	84

公開講座は「旅の博物学—観光、巡礼、渡り鳥—」をテーマに開講されました。講師・演題は下記のとおりです。

<b>第1回</b>	10月11日(土)
・旅の空の芸術家たち 山形大学 助教授 阿部成樹	
・スパイか、巡礼か? —中世の画家 ヤン・ファン・エイクの<秘密旅行>— 山形大学 教授 元木幸一	
<b>第2回</b>	10月18日(土)
・お伊勢参りの旅 —江戸時代の遠距離旅行の記録から— 山形大学 助教授 岩鼻通明	
・2003年映画の旅～リュミエール兄弟から 『千と千尋の神隠し』まで～ 山形大学 教授 阿部宏慈	
<b>第3回</b>	10月25日(土)
・いきものの旅 山形大学 教授 小田隆治	
・文学の中の旅人たち —プレ芭蕉・ポスト芭蕉— 明海大学 教授 山本陽史	

特別展は、平成15年11月10日から21日までの10日間、「江戸時代の旅いろいろ」と題し、附属図書館の会議室を会場に開催され、旅姿体験コーナーなどが好評を博し、期間中600人近い入場者で賑わった。

### 平成14年度見学者総数

一般成人	個人	445人
	団体	45
大学生	個人	1,434
	団体	256
児童・生徒	個人	6
	団体	355
合計	個人	1,885
	団体	655
	総数	2,540

山形大学附属博物館報 No.30 2004.3発行  
編集兼発行人 山形大学附属博物館  
〒990-8560 山形市小白川町一丁目4-12  
(TEL) 023 (628) 4930 (直通)  
(FAX) 023 (628) 4909  
<http://klibs1.kj.yamagata-u.ac.jp/museum/>